

## 20年間の合唱団の歩みと共に、私も少しは成長できたのでしょうか

鈴木 優

合唱指揮者にとって、できなければならない仕事には、とても多くのことがあります。特にアマチュアの合唱団を指揮する者は、大きく分けても「演奏者としての仕事」「トレーナー、あるいは教育者としての仕事」そして「プロデューサーとしての仕事」といったことが要求されます。

ここで、つくば古典音楽合唱団の音楽監督としての私の仕事の内容、そして練習の様子について書いてみたいと思います。

つくば古典音楽合唱団でのひとつのシーズンの最初の仕事では、まずプロデューサーとしての能力が問われることとなります。中心になるのは「選曲」です。1年間の練習がうまくいき、多くの方に参加していただき、その結果として演奏会が成功するためには、なんといっても魅力的な選曲をする必要があります。選曲において重要なことは、ひとつには合唱団員の音楽的な能力にとって無理がなく、約1年間の練習期間で一応の水準の演奏が可能であるということです。そして、もうひとつ重要なポイントは、なんといっても経済的な問題です。この数年は日本全体が不況であるため、公的な助成金を得るのが難しい状況になっています。当然、合唱団員にとりましても家計の中から趣味に支出できる金額は限られたものです。私たちの合唱団が設定している毎月の会費、演奏会のための負担金の金額は、健全に趣味として合唱団に集まってくださる方々にとって無理なく、適正なものであると信じております。そこから選曲にあたっては、有能な合唱団の会計担当者との共同作業が重要になります。演奏してみたい曲は無尽蔵にありますが、その曲の演奏に必要なオーケストラ、あるいは声楽ソリストに支払う経費が予算内に納まっていなければなりません。多くの方に一緒に歌っていただけるような魅力的な選曲をしたい、しかし予算の枠は守らなければならないというジレンマとバランス感覚のもとにこれまでの選曲がおこなわれてきたということは奇跡ですね。

曲目が決定すれば、すぐに楽譜が手配され、一緒に演奏していただく音楽家の方々の人選、出演の交渉といった手順になります。これは合唱団のコアになるメンバーにおまかせすれば大丈夫です。さあ、いよいよ練習開始です。ここからはしばらくトレーナー、あるいは教育者としての仕事です。合唱団の練習には二つの要素があります。「声を出す技術のための練習」と「譜読みから始めて、音楽を作っていくための練習」です。ここ数年の毎週水曜日の練習は次のような時間割で行っています。

- 19:05～19:30 パート練習（四つのパートが週代わりでおこなう）
- 19:35～20:00 声を出す技術のための練習（呼吸の支え、各母音の響かせ方といった基礎練習）
- 20:00～20:45 全体での音楽練習（主に譜読み、歌詞の読み方練習）
- 20:45～21:00 事務連絡、コーヒー・ブレイク
- 21:00～21:35 全体での音楽練習（譜読みができたものを伴奏付で歌う）

合唱団としての音楽作りの基礎となるのは、なんといってもそれぞれの声です。最終的に合唱としての美しい響きを実現するためには、個人のレベルで発声の技術を向上させることが不可欠です。それぞれが持っている貴重な声を、より美しく響く楽器に磨き上げていただきたいと思います。そのため毎週の練習でも声を出す技術のための練習を重視しております。また、それを補うために個人レッスンの機会をできるだけ設けるようにしています（団員特別価格、30分1,000円は1990年以来価格据え置きです）。この個人レッスンの成果が団内音楽会にまで発展したことはとても楽しいことです。合唱においては全体のために自分の声を合わせていく歌い方が必要な

ので、団内音楽会で団員の皆さんが個性を解放して歌うのを聴くのは大きな喜びですし、合唱団としての音楽にもおおいにプラスになっています。

そして音楽を作っていくための練習となります。まず、その音楽についてのイメージを少しでも持っていただけるように、取り上げる音楽の作曲者やその曲が作曲された背景について、エピソードを交えて簡単に説明いたします。それから合唱団の皆様に譜読みをしていただくのですが、忘れてはならないことは合唱団には老若男女、さまざまな人々が集まってくださっているということです。現在、20歳代から70歳代と幅広い年齢層の方が在団しております。音楽的能力といたしましても、音楽大学を卒業された方から、楽譜というものをなんとなく音の上がり下がり記されたグラフだという程度の認識でいらっしゃる方まで様々です。それにもかかわらず、集まった方々が一緒に音楽を創り上げようという行為はなんと崇高なことでしょう。

このような集団を指導していく上に重要なことは、その場の「空気を読む」ということです。どのレヴェルの団員に焦点を合わせた指導をしていくか、課題をどの程度達成できたら先に進むことにするか、ということを臨機応変にさじ加減していくことは、毎回の練習が楽しさと適度な緊張感をもっておこなわれるために欠かせないことです。各自が自分のパートの音をだいたい歌えるようになり、全体としてもハーモニーが整ってきましたら、次は歌詞についての練習となります。私たちが歌う音楽はラテン語かドイツ語の歌詞によるものが大部分です。どちらにしても、まず単語ごとに発音を練習していただき、次に文章として読んでいただきます。この段階で歌詞の意味、あるいは歌詞の内容の背景といったことを確認していただきます。「発音が良い人は歌がうまい *Chi pronuncia bene canta bene*」というイタリア語の格言があるのですが、それほど発音は重要です。また、歌詞の内容を理解することが、歌う際の表現に不可欠なものであるということは言うまでもありません。そして、いよいよ歌詞をつけて歌っていきます。歌詞を付けて歌っていくことによって、音楽のアクセントやフレーズの作り方もはっきりと決まってきます。さらにフォルテとピアノといった強弱や、テンポの変化といった表現に関する約束事も定着させる必要があります。こういった表現について考えるときに第一に尊重すべきなのは作曲家の指示です。つぎに重要なのは歌詞の内容であり、バロック以降の音楽であれば和声の進行です。個人の恣意的な表現というものは慎むべきでしょう。

この段階まで来ますと、演奏会まであと2ヶ月というところでしょう。この時期から私の仕事はトレーナーから演奏者に変わっていきます。演奏会で失敗しないように練習の際の合唱団員の集中力、注意力を高めていく必要があります。また声楽のソリストに出演していただく場合は、オーケストラとの練習の前にピアノでのリハーサルをしておきます。それから、これは私にとって1年間でもっともつらい仕事なのですが、演奏会当日にお配りするプログラムのための解説の文章を書くのも、この時期です(この苦勞の産物は、是非「つくば古典音楽合唱団創立20周年記念誌 定期演奏会 演奏の記録」をごらん下さい)。そして、オーケストラのリハーサル、合唱団、オーケストラ、ソリストが集まる練習、当日のゲネプロ、本番という運びとなります。つくば古典音楽合唱団において、私が「指揮者」であるのは1年間のうち、この3日だけであると思います。演奏会終演後は打ち上げ会です。いつも合唱団員やゲストの出演者が集まる前にビールを飲み始めています。打ち上げ会でのスピーチをすれば「今シーズンも終わった」ということになり、毎年少々飲みすぎることとなります。

そのような事を20年にわたって繰り返すことができたことは、とても幸運なことだったと思います。高校3年の時にすでにビクトリアの *Ave Maria* を音楽部の同級生をそそのかし4人で歌ってみました。東京混声合唱団でも合唱のノウハウを学びました。その後も多くの先生方から貴重なご指導を受ける機会に恵まれました。つくば古典音楽合唱団はこの20年間で大きく進歩いたしました。私自身も音楽家として少しは成長できていると良いのですが。